
起きて半畳

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
起きて半畳

【Nコード】
N8385I

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
天下人となった徳川家康。その彼が自分を誉めそやす家臣達に言ったことは。これは実際に彼が言ったことらしいです。

第一章

起きて半畳

俗に苦勞人と言われていた。またはケチとも狸親父とも言われていた。

これが徳川家康の評判である。とりあえずこんなものだった。

だが彼は天下人になった。関ヶ原の戦いに勝ち今や江戸城で征夷大將軍となった。その彼を天下人と認めないのは大阪の豊臣家だけだった。

その彼を天下は誰もがその天下を完全に自分のものにしたと見ていた。それはこの江戸では殊更にそうであった。

江戸は今まさに街になろうとしている。その急に街になろうとしている中で彼等は言うのだった。

「この江戸だつてな」

「ああ、家康様のものだからな」

「そうだよな」

彼等は口々にこう言うのだった。その急に街になっていく江戸の普請をしながら。

江戸城もまた然りであった。城は急にできあがってきていた。諸大名を動員してそのうえで築城させている江戸城も今は出来上がるうとしているところで後の巨大な姿にはまだなっていないかった。その江戸城の本丸に彼がいた。その徳川家康その人がである。

今彼は江戸城の己の部屋にいた。そこは緑の美しい畳が敷かれ一段上になっている場所に彼が座し下々の者達を見渡す場もあった。周囲はそれぞれ見事に絵が描かれた障子がある。金箔まで使われた実に見事な障子ばかりが並べられていた。

そこに太った小柄な老人がいた。白い鬚を上にしてやたらと丸い目を持っている。彼はその後ろに何人も連れている。そのうえで部屋を見回していた。

「殿、遂にですな」

「遂に天下を手中に収められましたな」

「手中にか」

その小柄な老人徳川家康は後ろにいるその者達の言葉を聞きながら部屋を見回していた。そのうえで彼等の言葉を聞いているのだ。

「わしが天下を手中に収めたというのだな」

「はい、そうです」

「その通りです」

供の者達はこのことを彼に話すのだった。

「実際にこうして將軍になられたではありませんか」

「源頼朝や足利尊氏と同じく」

かつて幕府を開いた者達のことも出た。

「幕府も開かれましたし」

「まさに天下は殿のもの」

彼等は口々に言うのだった。

「後は豊臣を倒すだけです」

「そうすれば天下は完全にです」

「確かにわしは將軍になった」

家康もそれは認めた。

「そして幕府も開いた」

「はい、ですから」

「天下はもう完全に殿のものです」

「さて、それはどうか」

ここで家康は足を止めた。そのうえで後ろの彼等に声をかけたのであった。

「天下はわしのものであるかな」

「ええ、後は豊臣だけです」

「豊臣さえ倒せば」

「豊臣のことを言っているのではない」

だが彼はこう言うのであった。

「確かにまだ豊臣はおる」

「はい」

「その通りです」

大阪にいる彼等はまだ健在であった。彼等を一体どうしていくのかがこの時の幕府の課題であった。何しろ天下にあるもう一つの権勢でありしかも莫大な富と多くの兵、堅固な城を擁していたからである。彼等を意識しないということは今までなかったのだ。

「ですから彼等がいますから」

「天下はまだ完全には」

「そうではないのじゃ」

だが家康は彼等のその言葉を否定したのだった。

「わしが言っているのはそういうことではないのじゃ」

「といたしますと」

「どういふことですか？」

「布団を持って来るのじゃ」

ここで家康はこう言っのだった。

「布団をな。この部屋にじゃ」

「休まれるのではないですね」

「そうではありませんね」

「うむ、違う」

そうではないと。こう答える家康だった。

第二章

「とにかくいいから持って来るのじゃ」

「はい、それでは」

「わかりました」

彼等のうち幾人ががすぐに布団を持って来た。その布団は畳一畳分完全に覆った。家康はその覆われた布団を見下ろしながら家臣達に語った。

「一畳じゃな」

「はい」

「それだけの大きさです」

「そう。一畳じゃ」

ここでまた言う家康だった。

「畳一畳。寝てそれだけじゃ」

「確かにそれだけです」

「ではこれは一体」

「寝てこれだけの場所が手に入る」

彼はまた言った。

「たった一畳だけな。手に入るのう」

「ええ。それじゃあ」

「これだけです」

「そしてじゃ。今わし等は立っておる」

家康は今度はこう告げた。

「こうして立っておるのう」

「はい、それもまた」

「その通りですが」

「立って半畳じゃ」

見れば確かにその通りだった。家康が立っている場所は半畳分だった。それだけである。

「それだけじゃな」

「立って半畳ですか」

「そして寝て一畳ですか」

「それだけじゃ」

家康はまた言った。

「立って半畳、寝て一畳じゃ」

「といますと」

「どういうことでしょうか」

「それだけのものじゃ。天下で自分のものになるのはそれだけじゃ」

これが家康の言葉であった。

「確かにわしは將軍になった」

「はい」

「そして幕府も」

「幕府も開いた。しかしわしの思うままになる場所はこれだけじゃ」

「僅かこれだけとは」

「それでは」

家臣達は皆啞然とした。その啞然とした彼等の顔を見ながらさらに語る家康だった。

「天下でわしの思いのままになる場所はこれだけじゃ。そしてわしのもものもこれだけじゃ」

「たったこれだけですか」

「天下を握られても」

「左様。天下人になってもそんなものじゃ。後は何もわしの思う通りにはならん」

また言う家康だった。

「そうした天下を治めるのが天下人じゃ」

「では天下を取っても」

「全てが思い通りにはならないのですね」

「何も思い通りにはならん」

今の言葉には達観さえあった。

「思い通りになるのは精々一畳分じゃ」

「では我等と同じですか」

「一畳では」

「左様、思いのままにできるものはな」

「こつ家臣達に語るのであつた。」

「秀忠にも後の者にも伝えておけ」

「そしてこつも言うのであつた。」

「このことをな。しかとな」

「は、はい」

「それでは」

このことは実際に当時次の將軍候補の一人であつた秀忠にすぐに伝えられ後の將軍家の者達にも伝えられた。この言葉が最後まで残つたのか徳川幕府は長きに渡つて続きその中で多くのものが生まれつた。家康は決して天下を自分のものとは考えなかつた。色々と嫌う人間が今だにいる彼であるがこのことだけは間違いないようである。その証に徳川の時代は実に長いものになりその治世は終始穩健で公を守るものだつたからである。

起きて半畳

完

2009・9・11

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8385i/>

起きて半畳

2010年10月8日13時05分発行